

## 破損仏の復原を介した日韓古代彫刻史研究の新手法について

九州大学 大西 修也

---

近年、レーザースキャナや高精度デジタルカメラなどの最新デジタル機器を用いて、遺跡や美術品の現状を保存し、データベース化するいわゆる文化財のデジタルアーカイブは、文化財の保存や再現の分野で実施に移されつつある。例えば、最大 100m までの測定が可能なパルスレーザーを使用して鎌倉大仏やプラサート・スーブラ N1 塔（アンコール・トム王宮広場）の 3次元デジタル化をめざしたキャドセンターを中心とするプロジェクト、あるいはレーザービームによる光切断方式を採用して中国四川省蒲江県石窟磨崖造像についておこなった早稲田大学の調査研究などが知られている。しかしながら事例の多くはデジタルコンテンツ化を目的としたもので、学術研究の側面から新たな価値の創出を目指したものは異なる。本研究は、文化遺産を測定しデジタルデータによる記録保存を行うのはもちろん、美術史研究の立場から得られた基礎データを活用し、文化財の修復や復原に積極的に役立てようとするものである。そうした視点から、当研究発表では破損仏を鑄造仏と石造仏に分け、それぞれに相応しい復原方法の選択と新しい研究手法について紹介する。

石造仏にあつては、韓国慶尚北道奉化北枝里磨崖仏及び栄州可興里磨崖三尊仏を事例に、現在進行中の復原プロジェクトについて報告。鑄造仏にあつては長崎県対馬市黒瀬銅造如来坐像及び同浄林寺銅造半跏像を事例に、具体的な復原方法と成果、新しい研究手法導入の意義について発表する。

1) 黒瀬銅造如来坐像（重要文化財）：黒瀬銅造如来坐像は新羅系の渡来仏とされ、当初は蓮華座や八角中台からなる豪華な台座上に安置されていたとみられるが、火災にあい破損して台座はもとより本体の下半部に大きな亀裂と歪みを生じてしまっている。復原はデジタル技術を応用して本体の歪みを修正し、破損した台座の復原をおこなうことである。特に、台座の復原については、彫刻史研究の立場から復原的考察を行った八尋和泉氏の先行研究があり、こうした八尋氏の実測データを分析し、八尋試案の評価・検証を兼ねる意味から、八尋案にそって復原を試みた。

2) 浄林寺銅造半跏像：美津島町久須保の浄林寺に伝世していた銅造菩薩半跏像で、昭和五十九年の対馬調査ではじめて確認され、その後の調査研究により半島渡来の百済系半跏像であることが明らかにされた。これまで発表者は、被災して上半身を失うが下半身はほぼ当初の姿を維持しているとの立場から、楕円形台座の特徴について言及してきた。今回の復原にあつては、火災で台座部分に歪みが生じた可能性が強いとの立場から、その修復が台座ならびに本体の造形にどのような影響を及ぼしたかを検証することにある。そのため、修復に加えた力と変形が確認できるよう実物大の粘土模型を用いて復原作業をおこなった。その結果、浄林寺像の台座も長野・観松院銅造半跏像の台座に近い円筒形であった可能性が高まった。